

淀川城北ワンドと庭窪ワンドにおける外来魚駆除状況(2025年の報告)

○渡邊 翔悟・山田 拓輝・奥野 駿平・三橋 雅子（大阪工業大学 城北水辺クラブ）
・田中 耕司（一財）河川情報センター）・鶴田 哲也（大阪産業大学）
・丸山 勇気・古澤 千春・原口 岳（大阪府立環境農林水産総合研究所）
・河合 典彦・綾 史郎（淀川水系イタセンパラ研究会）・高田 昌彦（琵琶湖を戻す会）

発表者らは「淀川水系イタセンパラ市民ネットワーク」で2012年よりイタセンパラの復活を目指して淀川下流域で定期的に地引網を曳き、外来魚の駆除活動を行っている。2025年も例年と同様に4月から11月の間に城北ワンド群の34,35号ワンドで原則月2日、庭窪ワンドの25-1,25-2号ワンドで原則月1日、1日について4～6回地引網を曳いて駆除活動を実施した。地引網を引いた総回数は、城北ワンドではのべ15日間に73回、庭窪ワンドではのべ7日に25回であった。

城北ワンドでは、2025年の総個体数中の外来魚個体数の割合（外来魚率）は、2024年と比べて約8%減り38%となり、外来魚の総数は昨年の3088匹から2381匹に減少した。特に個体数が減ったのがブルーギルで、2022年から2024年の3年間は2000個体を超えていたが、2025年は約半数の1100個体あまりと半減していた。一方で、タイリクバラタナゴ、オオクチバスではそれぞれ、約400個体から約700個体へ、約450個体から約550個体へと、やや増加した。

在来魚ではカネヒラは2023年に過去最多の600匹確認されたが、今年はその倍以上の1562個体が確認された。

この地引網と同様に継続して行っている外来魚駆除釣り大会でブルーギルが多数採れ、駆除ができたことや、日々の活動がブルーギルの減少につながったのかもしれない。今後も継続して外来魚駆除活動を実施していきたい。

庭窪ワンドは城北ワンドと比較するとやや浅い構造が特徴であり、フナの小型個体が多く捕獲された。外来魚率は約38%で、そのうちブルーギルが6割、オオクチバスが4割を占めており、城北ワンドでは多く確認されるタイリクバラタナゴがほとんど見られなかつた。城北ワンドとは確認される魚類の種、割合が異なり、淀川に元々あった搅乱環境下で形成される様々なワンドの環境の一つであると考えている。庭窪ワンドでも外来魚の駆除活動を継続し、在来魚の生息に適した環境作りにつなげていきたい。